

# 「み言葉のもとに集う」

## ——わたしたちを結ぶキリストの臨在——

### 5 はじめに

「鳩山のぞみ教会」は、キリスト教会である。

——〈キリスト教会〉は〈キリスト“の”教会〉である

——とすれば、そのキリストのお姿をどこに見出すのかが、根本問題である。

### 10 第 I 部 私たちを結ぶキリストの臨在を問う

#### 1. ご神体を持たない教会ではあるけれど…

(1) 「神さんどこにおるん？」という求道者の問い

(2) 「キリスト教会は形としてのご神体を持たない」という説明で済まされるか。

(3) 天的なものの地的な表れ；何らかの意味における「神秘」

15 ・モニュメントとしてのヤコブのはしご

「まことに主がこの所におられるのに、わたしは知らなかった」創世記 28:16

### 20 2 コリント人への第一の手紙第14章24, 25節が描く一世紀の教会の臨在

#### コリント人への第一の手紙第14章24, 25節

24 しかし、全員が預言をしているところに、不信者か初心者がはいつてきたら、彼の良心は  
みんなの者に責められ、みんなの者にさばかれ、25 その心の秘密があばかれ、その結果、  
25 ひれ伏して神を拝み、「まことに、神があなたがたのうちにいます」と告白するに至るであろう。

(1) 神臨在の基本的な成り立ち

・奇跡によらない

・「預言」ということ；「異言」に対して

30 ・占い師の言い当てでもない

・罪への気づき；言葉で神を認めなければ成り立たない存在であることを気づかせる。自分の人生と人間関係をゆがめているもの。世界をゆがめているもの。神を問題にしない人間の独善への気づき。神への立ち返り。

35



- (2) 聖会の重視へ；60回記念聖会に際する父・高橋秀夫の回顧  
・東京聖書学院の教育に貫かれたもの

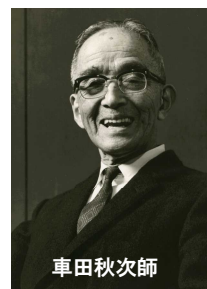
### 小林和夫先生の講演より

5 聖霊が教会を建設し、成長させていくということの中で一番大切なこと、それは御言葉信仰ということだと先生は言われました。聖霊は、夢や幻の中に出てくるのではない、聖霊は御言葉を通じて臨んで下さるのだと教えて下さいました。車田先生は、御言葉による説教を強調されました。説教とは、自分の経験や体験の話、あるいは人が感心する  
10 ような話をするのではなく、神の言葉に基づいて神の言葉を語るのだと言われました。車田先生が強調なさったことは、一言で言えば御言葉経験、御言葉の力であると言うことができるでしょう。

……〈中略〉……

15 車田先生は普通の方ですが、何か秘めておられるものをもっておられました。この「何か」ということを私たちに感じさせる説教を、私たちがしなくてはだめだと思いません。「何か」とは何でしょうか。それは「聖霊」です。聖霊が説教者と一緒に立っていて下さり、語って下さるのです。車田先生はスピリチュアリティ(霊性)の重要性を語られました。御言葉を信じる信仰と霊性の重要性を言われました。人間が神のかたちに造られたのは、そういうことが分かるように造られたということなのだ。神の世界のことが分かるようになる。

講演「車田秋次から受け継ぐべきもの」(『りばいばる』4月号より)



車田秋次師

- 20
- ・車田秋次師から受け継いだ説教感覚；「感か」→言葉（理屈）を超える何ものか
  - ・松木祐三師の言われる「霊味」ということ

## 5. 教会にキリストの言葉が聞こえてくる可能性

### ルカによる福音書第24章25～27節、32節

25 そこでイエスが言われた、「ああ、愚かで心のにぶいため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。26 キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入るはずではなかったのか」。27 こう言って、モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体に  
30 わたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説きあかされた。……32 彼らは互に言った、「道々お話しになったとき、また聖書を説き明して下さったとき、お互の心が内に燃えたではないか」。

#### ● 「説きあかされた」(27) は「通訳」という訳も可能

- 35
- ・「通訳」は、話の内容が問題なのであって、主イエスの肉声であることの重要性は退く。
  - ・事実、主イエスの肉声も御顔でさえも、失意の弟子たちを気づかせるものではなかったという物語であり、それだけに「説きあかし」の意義が際だっている。
  - ・聖書を物語ることが心燃えるようなキリストの臨在を来たらせていることは、主イエスの肉声を聞けなくなった一世紀の教会の希望であった。 **聖書を語るうちにキリス**
- 40

トの臨在が明らかにされるというみ言葉の不思議が一世紀の教会の中心にあったものなのではないか。

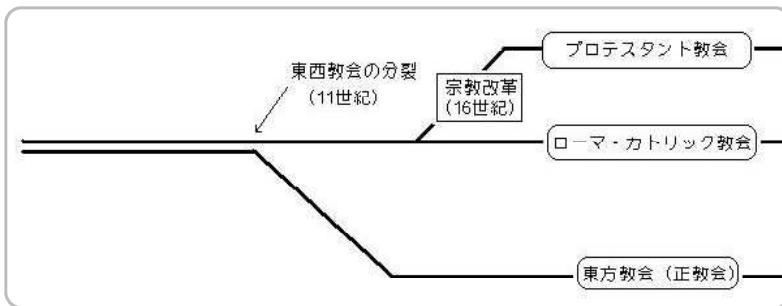
- ・言葉があるときにそこに他人には自由にできない人格があるということ。こうした言葉による臨在が教会の生命線であった。

5

## 6. 宗教改革に見えるもの——み言葉による臨在への回帰

- (1) ここまでで明らかにしてきたみ言葉によるキリスト臨在は、宗教改革で回復され、わたしたちプロテスタント教会のいのちの伝統となっているものである。
- (2) プロテスタント教会の礼拝は、カトリックのみ言葉の典礼の系譜にある

- 10 東方教会（正教会）は、聖変化を司祭が臨在を呼び求める祈り（エピクレシス）



によるとする

・カトリックは、司祭の祈りではなくみ言葉の朗読の中に「聖変化」を見る

・プロテスタントにおいて聖変化の考えは異なるも、み言葉の朗読の中にキリストの臨在を見ようとして

15

いるという点では、カトリックの系譜にある。

- 20 (3) 宗教改革者たち（プロテスタント）が臨在をどう捉えたか

### ルター「会衆の礼拝式について」

三つの大きな乱用が、礼拝の中に入り込んでいる。第一は、神の言が黙していることであって、教会の中には、朗読と歌唱だけがある。これは最も有害な乱用である。第二は、神の言葉が黙していたので、聖者物語や歌や説教の中に多くの非キリスト教的な寓話が入り込んでいる。…第三は、そのような礼拝が（信仰を励まして確かさを与えることがないために、恐る恐る）神の恩恵と救いを確かめる業として行われていることである。そこでは信仰はなくなり、すべての人が教会のために献金をし、牧師や修道士や修道女になろうと欲した。

いまこれらの乱用を改めるため、私たちはまず第一に、キリスト者の会衆は、どんなに短くても神の言葉が説教され、祈りが捧げられるのでなければ、集まるべきではないことを知らなければならない。



### カルヴァン

…このような誤謬が生じたのは、祝聖（聖餐のためにパンとぶどう酒を意義付けること）の遂行のかかっている約束が、パンやぶどう酒の要素そのものには向けられず、これを受ける人々に向けて定められている事情を考察していないからである。また、キリストはパンに向けて語って、これをわたしのからだであるとしたもうたのではなく、弟子たちに「これを食べよ」と命じ、彼らが御からだと御血とにあずかることを約束したもうたのである。…われわれはここで、この制定語が[心を持たぬ被造物たる]パンやぶどう酒の要素に聞かれるかのように、もぐもぐとつぶやかれさえすれば十分であるような、何かの魔術的呪文であると空想してはならない。そうではなく、[よってもって聖礼典の聖別される]「言葉」とは、聞くものの信仰を建て、かれらのたましいの内に透徹し、かれらの心情に印銘され、固着し、その約束するところを成就することによって効力をもたらす、生きた「説教」であるとわれわれは理解すべきである。（『キリスト教綱要』第四篇第17章39節）

- ・当時のローマ教会の聖職者たちのみの礼拝への批判
- ・ローマ教会の礼拝の仕方が、臨在を儀式における魔術的なものへと変えてしまうことに対して、説教による臨在と、それが聖餐を意味づけるという理解を主張した。カトリックがもともと持っていた礼拝理解である、み言葉の典礼への回帰と言える。
- 5 ・み言葉を語る中に**キリスト臨在の出来事**が起こる、というのがプロテスタント教会が明らかにした基本線

## 7. 神の言葉が聞こえてくる説教を問う

(1) 説教において体験される「キリスト臨在の出来事」とは何か

- 10 ・神の言葉が聞こえてくる、という体験
- ・しかし、説教というのは、人間が語る言葉
- ・教祖さまの「お告げ」ではなく、いろいろな内容を持つ言葉
- ・その言葉がいかなる意味で神の言葉であるのか

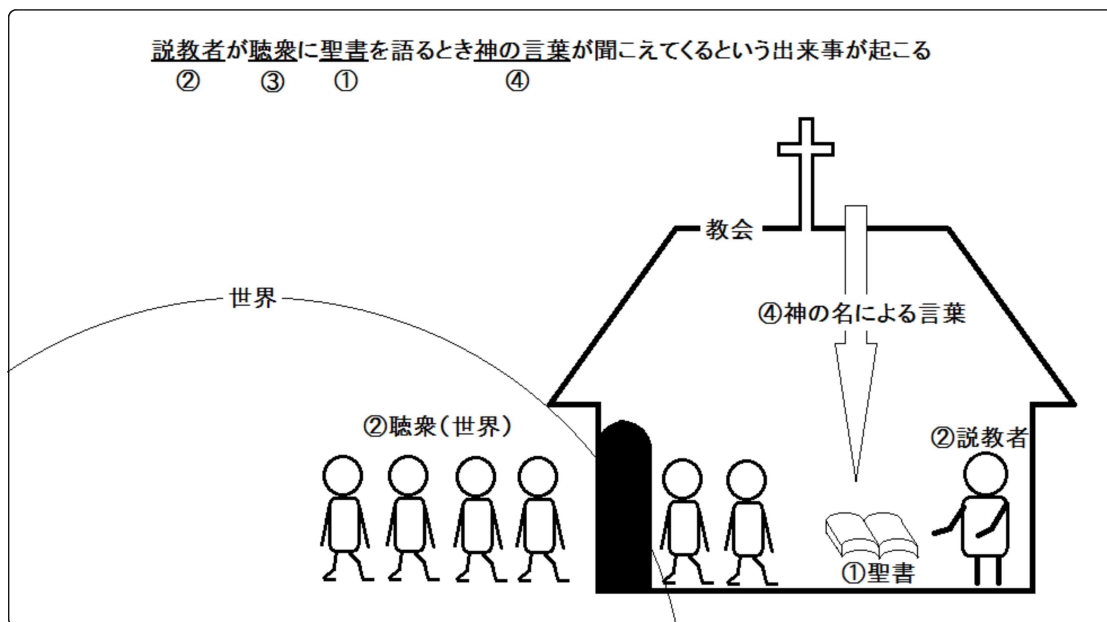
### 説教に含まれる言葉

- ①聖書の言葉
- ②説教者の言葉
- ③聴衆(世界)の言葉
- ④神の名による言葉

15 (2) 説教の言葉とはどういうものか (ハイデルベルク・テーゼ)

- ・言葉の源泉から少なくとも右の4つの言葉の種類に分けられる
- ・この四種の言葉が混合されつつ一つの言葉の流れを作り、《神の名による言葉》を聴き手に届けようとする。そのときに、聖書が立体化する。

20



25

30

35

## 8. 説教が起こす出来事の広がり——共に説教し始める教会共同体

●神の言葉が聞こえてくるという出来事は聖霊の運動である。

- ・聴き取った人間に悔い改めと信仰を内容とする感動を与える
- ・その感動が聴衆にも言葉を生む「今日の説教はこんな話だった!」
- 40 ・それもまた聖霊の運動である。伝道の原形でもある。

・共に説教する共同体の表れの一つと言える

「われわれがここに明瞭に見て取るのは、神の言葉が、もともとは、今日とは全く異なった仕方で伝えられていたということである。なぜならば、ただ単に預言者たちだけが順序よく語っていたのではなくて、会衆席に座るごく普通の人々もまた、み霊が自分に注ぎ込んでくださったままに語ることを許されていたのである。このやり方が全く廃ることがなかったとすれば、教会の中にこれほどの過ちが生じることはなかったであろう。」(宗教改革者ツウイングリ)

10

**ここまでのことをまとめて言おうと、教会の中心はキリストの臨在であり、それはみ言葉の説教によって起こるものである、ということです。**

**しかもそれは、一世紀の使徒たちの教会の中で体験されたものであり、宗教改革によって明らかにされたものであり、わたしたちホーリネスの流れも、この不思議な喜びの前に集い続けているのです。**

15

20

